

# 即興で、論理的に英語でやりとりする生徒の育成 ～見方・考え方を働かせる工夫を通して～

若山竜介・宮本和彦

## 1 英語科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

英語科では、「夢中になって問い続ける生徒」の姿を、「どうすれば相手に自分の思いがより分かりやすく伝わるのか、相手の思いをより理解できるのかを思考し、既習の知識や技能を状況や場面に合わせて活用し、相手に配慮して、自ら積極的に関わろうとする姿」と捉えました。

母語ではない言語でのコミュニケーションにおいて、多くの生徒たちは、わからないことがあっても何とか推測して理解する中で、あいまいさを感じたり、言いたい事と言える事のギャップを感じたりしています。英語学習においては、このあいまいさやギャップを感じて、これらを問題として捉えるからこそ、あるべき姿に向かって学び続けるのだと思います。上記に示した「夢中になって問い続ける生徒」の姿は、このギャップを埋めるために、見方・考え方を働かせ、試行錯誤して「言語」と「内容」を結び付けながらコミュニケーションする自分を更新し続ける姿であると言えます。

## 2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

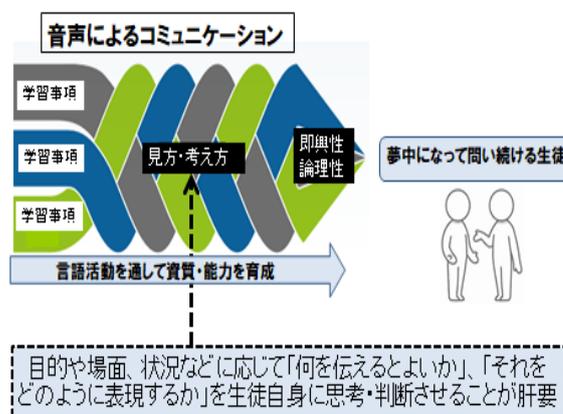
### (1) 教科の本質に迫るプロセス

英語科では、教科の本質を「英語を通じて、コミュニケーション能力を育成すること」と捉えています。英語はコミュニケーションツールであり、情報の伝達、意思の疎通等に必要な手段です。

英語を通じて、コミュニケーション能力を育成するためには、日々の授業や言語活動において、実際のコミュニケーションに近い場面を設定し、英語を多く使う体験を積み重ねる必要があります。

実生活では、日常の会話から討論に至るまで、話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向でのコミュニケーションの機会が多いです。このことは、国際的な基準:CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠)でも、「『話すこと』のやりとり (interaction) は、(略) 言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められ、コミュニケーションにおける中核的役割を果たしている。」と述べられています。そこで、この音声によるコミュニケーションに焦点をあて、英語科の本質に迫ることにしました。

音声面に着目し、上記で述べた「夢中になって問い続ける生徒」を捉えると、相手とコミュニケーションをとる時、頭の中で意見や考えを組み立てる時間が長くとれず、相手の質問や意見に即座に対応していくことが求められます。つまり、不適切な間を置かず、相手の発言や目的に応じて、即座に答えを返していく「即興性」と、英語が持つ言語としての特徴を理解し、相手の目的や反応に応じて、どんな表現や言語材料を選択すればよりわかりやすく伝わるかを思考・判断する「論理性」の双方の力が欠かせません。言語活動を通して資質・能力を育成していく中で、「何を伝えるとよいか」、「どのように表現したらよいか」を、生徒自身が思考・判断し、英語の見方・考え方を働かせることで、生徒の持つ知識や技能を駆使して、相手意識を持って伝えるようになっていきます。このサイクルを繰り返し、継続的に行うことで、発話する際の「即興性」と「論理性」が日々洗練されていきます(資料1)。



資料1 夢中になって問い続ける生徒像

### (2) いかに関「見方・考え方」を働かせるか

今までの英語の授業の中には、教師が表現の例やパターンを例示した後で、それを参考にして、生徒が表現活動に取り組むことがありました。このような場面では、生徒は示された表現例を参考にしながら活動を行い

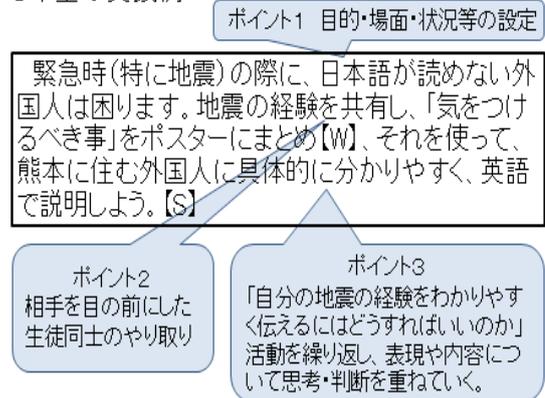
ますが、ややもすれば、話す内容は考えたとしても、英語でどのように表現するかについては、ほとんど考える必要がなかったのではないのでしょうか。

現実のコミュニケーションでは、様々な場面があり、状況も変わっていきます。1つの場面で使われた表現が、同じ目的であっても、別の場面で適切であるとは限りません。その場合、伝える目的は何なのかに加えて、相手の状況はどうか等を、もう1度自分の中で考えてみる必要があります。英語の見方・考え方を働かせるとは、このようにコミュニケーションの様々な条件に照らして考えることであり、「何を伝えるとよいか」と「それをどのように表現するか」を、生徒自身が選択していくことが肝要です。そこで①～③の工夫を行いました。

### ①目的・場面・状況の明確な設定

まずは、コミュニケーションの目的や場面、状況を設定し、生徒にしっかりと理解させるということです。そうすることで、目的・場面・状況を根拠に、生徒が英語の見方・考え方を働かせ、言葉と内容を選択していくことができます。例えば、「Unit4-To Our Future Generations—New Horizon 3 (東京書籍)」では、右のようなパフォーマンス課題(資料2)と到達目標を明確にして示しました。このことで生徒は、相手の立場や状況を把握し、地震の際に気をつけることについて、どんな内容を伝えればよいのかなど目的達成のために、思考・判断するようになりました。

#### 3年生の実践例



#### 資料2 パフォーマンス課題例

### ②見方・考え方が働く生徒同士のやりとり

次に、相手を目の前にしたやりとりでは、「内容」と「英語表現」を同時に思考・判断する必然性が高まり、英語の見方・考え方が働きやすくなります。伝える相手として外国人を設定した場合、英語を使う必然性は高まりますが、ALTが来校した時だけなどに、その機会は限られています。見方・考え方が働く場面を増やすためには、課題を工夫し、生徒同士がやりとりする場面を増やす必要があります。

先ほどの「Unit4-To Our Future Generations—New Horizon 3 (東京書籍)」の例では、パフォーマンス課題を達成するために、熊本地震での自分の経験をより具体的に伝えるために、英語を駆使して、相手と情報を共有していきます。この際、1度きりの活動で終わるのではなく、4つのテーマをもとに話をしていきます。単に繰り返してやりとりするのではなく、視点に沿って話をすることで、生徒が見方・考え方を働かせ、「内容」と「英語表現」に着目して話すようになっていきます。

### ③振り返りの充実

最後に、英語の見方・考え方を豊かにするためには、生徒がやりとりする活動を繰り返す中で、言語面・内容面において振り返ることが重要です。振り返る際には、生徒自身が自ら気づきやすくなるように、単元のゴールを共有したり、振り返りの視点を示したりすることなどが考えられます。

「Unit4-To Our Future Generations—New Horizon 3 (東京書籍)」の例では、やりとりを記録したVTRを生徒全員で視聴し、共通の視点を通して振り返る時間を設けました。生徒がお互いの意見を共有し、そこに教師が意味付けすることで、今後のやりとりにも生かせるような質の高まりが見られました。

このような英語の見方・考え方を働かせる手立ては、生徒自身の学びがその単元のみにとどまらず、自ら継続して、学びを深めていくサイクルを生み出すこととなります。

#### <主な参考文献>

文部科学省：中学校学習指導要領解説外国語編，2018

熊本大学教育学部附属中学校：平成30年度研究紀要，2018

国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料，中学校外国語，2020

山田誠志：自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業：使いながら身に付ける英語教育の実現，日本標準，2018